

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)
／田中 大輝

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

私は、2002年から一貫して様々な名詞表現—量化詞、wh句、とりたて詞を含む名詞句、グループを指す量化表現など—の作用域とその意味解釈の研究を行ってきた。特に近年は、言語使用者の知識状態の変化という点に注目し、言語使用者による知識の蓄積・整理・統合のメカニズムを具体的にモデル化することを目指してきた。そこで、今年の科研費申請においては、次の2点を柱とした研究計画を提示したいと考えている。

「1、言語使用者の認知メカニズムのモデルの精緻化」

(これまで、作用域を持つ名詞表現に対象を限定して認知メカニズムのモデル化を進めてきたが、次は疑問文や条件文など、話し手と聞き手の知識状態の違いがより如実に表れる構文を対象に入れて研究を進め、認知メカニズムのモデル化をさらに精緻に進めていく。

「2、第二言語習得(日本語教育)への応用」

モデルの精緻化が一通り終われば、その成果を第二言語習得(日本語教育)に応用したいと考えている。学習者が母語話者と意思疎通がうまくできないときには様々な要因が考えられるが、「当該の表現を使用する際に母語話者が持つ【前提】を学習者が持っていなかったために齟齬が生じた」「当該の表現を使用することで母語話者は聞き手(学習者)にある【推論】をさせようとしたが、そこがうまく伝わっていなかった」などのケースも多々見られる。「1」のモデルは、まさにその【前提】や【推論】に関する情報処理をいかに母語話者が行っているかを表したもので、学習者が陥ったその状況がなぜ生じたのか、どうすれば解決できるのかななどを、学習者(や指導者)に分かりやすく提示できるようにしたいと考えている。

2. 点検・評価

「年度目標」で立てた計画通りに科研費の申請を行った。申請した計画の具体的な内容は以下の通りである。

【一年目】(「1、言語使用者の認知メカニズムのモデルの精緻化」に関連する部分)

自身がこれまで最も幅広い側面から観察を進めてきたサエの意味記述を手掛かりとして、話し手がサエ文を発話するまでに至るプロセス、

聞き手がサエ文を理解するまでに至るプロセスをモデル化する。そして、その成果をモヤダケなど他のとりたて詞、例示を表すやなどに適用し、

モデルとしてより一般的な形に仕上げる。

【二年目】(「1、言語使用者の認知メカニズムのモデルの精緻化」に関連する部分)

モダリティのラシイ・ヨウダ、終助詞ヨ・ネ、指示詞コ・ソ・ア、条件文、疑問文など、自身がこれまで扱ってこなかった文法項目の中で、

話し手と聞き手の知識状態の違いが特に色濃く反映される表現を抽出してモデルに適用し、前年度までに得られたモデルの一般性をさらに高める。

【三年目】(「2、第二言語習得(日本語教育)への応用」に関連する部分)

日本語学習の現場(日本語学習者のタイプ)を以下の3つに分け、タイプごとに応用のあり方を考察する。

- (1) 日本語を学ぶために日本に来て暮らしている学習者の場合
- (2) 日本で暮らす中で日本語を身に付ける必要が生じて学んでいる地域学習者の場合
- (3) 海外で日本語を(趣味として／将来の仕事のために)勉強している学習者の場合

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

私が所属している言語系コース(国語)は、平成24年10月1日現在で33名の大学院生が在籍している。大学院の収容定員は言語系コース(英語)と合わせて70名であることから、定員充足率は決して低くはない。しかし、現職教員が4名というのは決して多いとは言えないだろう。確かに現職教員で大学院生になるというのはいろいろな意味で大変であり、敷居が高く感じられるというのは大いに理解できるが、「現職教員が大学院生になることによるどのような利点があるのか」「現職教員大学院生は実際にどのような生活を送っているのか」「現場復帰してからはどうなるのか」など不明な点が多いことからこの足を踏んでいるという現職教員も少なくないと思う。そこで、現在在籍している現職教員大学院生や修了生たちに協力を依頼し、「入学するまで不安だったこと」「在籍中の生活のこと」「修了(職場復帰)後のこと」等についての具体的な体験談を交えた説明会を、まずは学生の出身校で、そして徐々にその周辺校で行っていきたく思う。今年度はそれに向けた準備を進めていきたい。

2. 点検・評価

本コースに在籍する現職教員大学院生(一名)に協力を依頼し、「学校教員の持つ大学院のイメージ」「当該の学生が本学を受験するに至った経緯」「在籍中(今日まで)の収穫」「それを現場に戻ってからどのように活かすか(勤務校への還元方法・同僚への説明機会の持ち方なども含む)」について聞き取りを行った。また、他大学を卒業して本学大学院に入学した大学院生数名にも、「本学を受験するに至った経緯」「本学で学ぶことの利点」「母校との違い」「母校の教員や母校に在学中の後輩との繋がり」等に関して聞き取りを行った。今後もこういった声をさらに幅広く集め、意見を集約することで、外部(学校現場・他大学)からの受験生(現職教員・大学生)に対してもアピールできる環境作り、教育・研究の実践、宣伝活動のための基盤としたい。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

私が担当する授業は、次のように運営上の目的(方向性)が異なる3つのグループに分けられる。

- (1)「日本語語彙論」「日本語文法演習」: 日本語教師(国語教師)となる学生たちに、日本語についての理解をより深めさせる。
- (2)「日本語教育実習」「教育実践フィールド研究(国語)」: 日本語教育専攻の学生たちに学習者のニーズに基づいた日本語教育を実践させる。
- (3)「日本語Ⅲ」「日本事情・日本文化」: 留学生に日本語や日本についての理解を深めさせる。

しかし、それぞれを独立して(切り離して)運営するのではなく、相互に関連し合えるような構成(たとえば、(1)の授業で学んだことを(2)で実践させる、(2)の受講者に実践の場として(3)を与える、(3)の受講者に日本(語)について気づいたことを(1)の受講者の前で発表させる、など)にして、学習者同士、授業間でinteractionが図れるようにしたい。

2. 点検・評価

- (1)「日本語語彙論」「日本語文法演習」について
受講生が少人数である(各8名、7名)ことを活かして、学生への発言(発表)機会を多く与え、相互に意見交換をしながら日本語について理解を深めるということを実践できた。
学期末に行った私的な授業評価アンケートでも、「ディスカッションがあって頭が整理できました」、「発表資料の作り方でチェックしていただいて今後の研究にも役立ちます」など、少人数だからこそ実践できた内容を評価する声が多かった。
- (2)「日本語教育実習」「教育実践フィールド研究(国語)」について
いずれも、地域の日本語学習者を対象として日本語教育を実践させた。「学習者に対してよりよい授業を行うことを目指す」のはもちろんであるが、これらの授業では、特に実践後の「反省」を重視し、撮影したビデオも使いながら客観的に自分(たち)の授業を振り返り、互いにフィードバックを与え合うことで、「実践が終われば終わり」ではなく「今回の経験を次に活かす」ことを常に意識させるよう努めた。
- (3)「日本語Ⅲ」「日本事情・日本文化」について
「日本語Ⅲ」では学術的文書の作文指導を、「日本事情・日本文化」では身近な話題をテーマとしたグループ対抗のディスカッションを行った。
いずれも一部の受講生にとっては難しい内容となったが、少人数である(各9名ずつ)ことを活かし、一人一人に詳細な指導を行うことができたと思う。
学期末に行った私的な授業評価アンケートでも、「授業資料が充実していた」「(日本や日本語のことだけでなく)他の国のことやチームワークも学べた」と好評であった。
- (4)interactionについて
「(1)の授業で学んだことを(2)で実践させる」という側面はある程度できていたと思うが、
「(2)の受講者に実践の場として(3)を与える」や「(3)の受講者に日本(語)について気づいたことを(1)の受講者の前で発表させる」
という側面は実践することができなかった。今後の課題としたい。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

現在、とりたてて詞サエを話し手が発する際のプロセス、聞き手が理解する際のプロセスについて研究を進めているところである。その成果を今年度中にまとめて論文(連合大学院基準に準拠するA論文)として発表したい。

2. 点検・評価

「今年度中にまとめて論文(連合大学院基準に準拠するA論文)として発表する」ことは叶わなかったが、現在執筆の最終段階であり、来年度早々には投稿できる予定である。今年度の研究活動の最も大きな収穫は、11月24日(土)・25日(日)に九州大学で開催された日本言語学会第145回大会に参加し、最新の研究成果に触れることができたこと、特に、「脳波から見た言語理解研究」というワークショップで医学的観点や認知心理学的観点からことばへのアプローチを行っている研究者たちと議論する機会を得、自身の研究の幅を広げることができたことである。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

外国人留学生プログラムコーディネーターに就任したため、国際交流チームと連携し、留学生たちが就学・生活その他のような点に困難を感じているのかを適切に把握し、助言を行っていきたい。

2. 点検・評価

外国人留学生プログラムコーディネーターとして、主に以下の活動を行った。

- ・本学図書館に配架するための外国人留学生向けの図書購入に関するアドバイス
- ・日本語補講を担当する非常勤講師へのアドバイス
- ・外国人留学生と学長との懇談会(12/21)への出席
- ・教員研修留学生の研究発表会及び修了式(3/4)への出席

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

鳴門ダイバーシティクラブと共催する鳴門市日本語教室や徳島県教育委員会が進める「帰国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル事業」に携わることで、地域日本語教育や外国人児童の学習支援に何が求められているのかを把握し、自らの知識と経験を現場に還元していきたい。

2. 点検・評価

(1)「鳴門ダイバーシティクラブと共催する鳴門市日本語教室」について
10/3(水)から2/13(水)まで全14回参加し、鳴門ダイバーシティクラブやボランティアの学生とともに地域日本語教育の実践に努めた。

(2)「帰国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル事業」について
徳島県教育委員会と協力し、主に以下の職務を全うした。

- ・「帰国・外国人児童生徒支援連絡協議会(11/22、2/28)」への講師としての参加
- ・「飯泉知事との意見交換会「わくわくトーク」(12/11)」への講師としての参加
- ・「日本語教育に係る豊橋市への学事視察(12/13)」への参加
- ・「帰国・外国人児童生徒支援のための研修会(3/8: 本学にて開催)」の実施責任者

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

--